

東北大学出版会 報

第 33 号

宙

おおぞら

〒 980-8577
仙台市青葉区片平 2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
www.tups.jp
info@tups.jp

2020 年 9 月

自著を語る



α 星

『ヨーロッパワイン文化史
——銘醸地フランスの歴史を
中心に——』

野村 啓介

とりたててワイン好きだったわけでもないが、学生時代のボルドー留学が運の尽きであった。ワイン三昧の日々に陥ったばかりでなく、いつしかワイン史研究に手を染めるようになり、地域政治関連の一次史料を読んでも、ワイン関連の記述が気になってしまいう体質になってしまったのである。大学教員になってからは、歴史学講義に潜りこませるワイン関連の事項が徐々に増え

ていき、本書に結実することになる講義ノートが自然と膨らんでいった。

よくある通史の内容をすべて省く勇気もない筆者は、政治史的、社会史的展開の概略をおさえつつ、そこにワイン文化にかかわる側面をからめることにした。初学者の理解に資する工夫を心がけつつ、最新の研究成果も散りばめ、ワイン愛好家のみならず、欧州史学徒にとっても必読の書とならん、というのが所期の目標であった。フランスでのワイン三昧が本書の血肉ともなっていることは、筆者を知る人が読めば行間に透けてみえるにちがいない。

前置きが長くなった。本書は、ワインという飲料を切り口に、ヨーロッパ文化の諸相を歴史学的に考察する観点から、古代から現代にいたる欧州史をワインを軸に駆

けめぐり、歴史的背景をおさえながらヨーロッパ文化の真髄ともいえるワイン文化のダイナミックな展開に迫ろうと試みる。このなかでいくつかの柱を意識しつつ記述をすすめたわけだが、その柱のひとつに大航海時代以降の「コロンブスの交換」（クロスビー）にともなう食の異文化交流という側面が念頭にあった。それは、ヨーロッパとその外界のあいだで織りなされた相互的な影響関係である。ワインはヨーロッパ外へと運ばれていったが、それは植民地拡大史とも表裏一体をなす。その背景を深くたどっていくと、砂糖プランテーションと奴隷労働という欧米列強の恥部に達する。

別の柱としては、現在ワインの世界で重視される「テロワール」に関連する諸問題であり、原産地呼称制度の史的展開に力をいれたのは、この動向を強く意識していたからであった。テロワールは、ワインの個性を生み出す主要因であると考えられて、ことのほか重視される傾向にある。ただしそれは、ワインの長い長い歴史からすればつい最近の現象にすぎない。そもそもテロワールという用語は、ワイン販売が不振に陥った一九九〇年代から頻繁にワイン誌上に登場するようになったのであり、ワイン販売戦略に根ざす面が強い。テロワール論の流布

は、ワインのグローバル化進展の産物なのであり、同時にそこには一種のローカリズムの表明という性格も濃厚である。他方で、テロワール論の伸長は健康志向や自然志向（代表例が「自然派ワイン」の登場）などとも連動している。概念の守備範囲は時とともに肥大化し、今やワインをとりまくあらゆる環境的影響の総体をさすことさえある。こうなると、結局のところ、ワインはすべて何らかのテロワールに由来することになり、ひいてはテロワール概念そのものの存在意義がなくなる。概念の飽和状態に達するのも時間の問題なのかもしれない。

ところで、日本酒業界からは、以上のような欧米ワイン業界の動向に熱視線が集まっているようだ。そこにも「テロワール」の波（「農」と言える酒蔵の会」の動向など）がおしよせているのである。ここでキーワードとしてあげられるのは、サステナブルやエコロジイなどといった、自然派ワインにも通底する合言葉である。テロワール論そのものがいまだ不分明な部分をもつが、それでも今後の基調になるにちがいない。

思うがままに書いてきたが、ここでわかったのは、自著をふりかえると心残りばかりが目につくということである。とくにヨーロッパ史に関して、「痒い所に手が届く」

とまでいかないことは最大の反省点である。ともあれ、最近では身体がビール・日本酒のほうを志向するようになってしまい、それでワイン史専門家といえるのか、との心の声も聞こえてくる。頭の痛いところである。
(のむら けいすけ・東北大学教授、西洋史学)

野村啓介 著

ヨーロッパワイン文化史

銘醸地フランスの歴史を中心に

ワインを切り口にヨーロッパを学ぶユニークな歴史書。宗教や習慣と密接に関係するワイン文化の本質に迫る。



A5判・二四二頁・定価(本体二〇〇円+税)



β星

読むこと考えること

深谷優子

思えば、昔から本を読むのが好きだった。学校に通っていた頃は、水泳部や陸上部、オーケストラ部など部活動に熱中しつつも、読む習慣はなくなかった。家にある本は何十回と読んだし、図書館にも入り浸った。手近に本がなければ教科書でも新聞でも自分で書いてでも読む。そんな子どもが大きくなって、今では、読んだり書いたりすることで人はいかに学ぶのか、読解や作文、教授・学習の心理学の研究をするようになってしまった。文字を読むことの何が私をそんなに捉えたのか。読むことで、私は何かを知る。何かに気づく。時には笑い、時には驚き、あるいは涙する。つまり、基本的に何かを獲得する、何かが変容する過程が、読むという営みなのだ。しかも、それは読むたびごとに生じ、その結果得られる情報や情動が異なりうる。この事実は、子どもも時代の私を魅了した。同じ物語を何回も読んでいるのに、なぜ毎回愉しめるのだろうか。なぜ毎回新たな気づきがある

のだろう。前に読んだ自分と今の自分との何がどう違うのだろう。

自分のなかでの違いやゆらぎに加え、他人と自分との違いにも興味をひかれた。同じ教科書を使っているのに、なぜその理解や記憶が違うのか。同じものを読んだときに私と隣の人が異なるものを獲得しているのなら、その違いは教科書や本ではなく個人に由来するはずだ。こうした思いが心理学へ、とくに人がどのように学ぶのかの探求へと私を誘った。

研究においても、また大学での授業実践においても、私が好んで用いるのが学術雑誌の査読に着想を得たピアレビュー方式での協同推敲である。これは、学生が書いた essay をお互いに読んでコメントし合い、その後各自が推敲する活動だ。自分の言葉で言い換える作業（パラフレーズ）のため、同じトピックであっても結果として記憶も異なるし書くものも異なる（人は、自分が理解したように記憶する）。なので学生は、人によってこんなにも違うのか、と驚く。人がたくさんいるから、多様性がそこにあるからこそ可能な学びである。ここではまた、多様な意見に触れるだけでは essay そのものや学生の理解を改善するには不十分であり、多様性を明確に言語化

できることが、知識の再構成と関連していることが明らかとなっている。

もちろん、読むことだけがよいこと、読むことは常によいこと、と考えているわけではない。それは、ある意味食べることに似ている。何をいつどう調理してどのように食べるか。前後にどういう活動をするのか。それによって、身体に与える影響は異なる。読むことも同様で、目的に応じた方略や活動が鍵となる。

何か特定の情報を知りたいとき、その情報を検索し同定し抽出することが読みの目的となる。そうした読みでは明快さや迅速さが好まれ、ともすると断片的で浅薄な処理になりがちである。それに対し、自ら問いを立て、疑問を温め、予想したり振り返ったりする読み方も可能である。書かれていること、書かれなかったこと、その背後に何があるかをじっくり考えながら読む。今の私たちの生活において、曖昧さや分からなさに耐えながらも考え続ける機会は、はたしてどれだけあるだろうか（研究活動は別として）。自分のペースで熟考しようとするとき、やはり読むという文化的実践が適しているように思われる。

現在、履歴から好みを予測して個に tune した広告や

記事、音楽や本の提示が日常的に行われている。そこでは私たちはただ消費者・享受者として在ることも可能だ。そんな環境のなかで、価値を創造する担い手となるには何がクリティカルなのか。それが、熟考する力や時間だと私は考えている。なぜならば、創造には想像が必要であり、想像は熟考により裏打ちされるものであるからである。

（ふかや ゆうこ・東北大学大学院教育学研究科准教授、
教育心理学）

新訂 学習指導要領は国民形成の設計書

—その能力観と人間像の歴史の変遷—

水原克敏 高田文字 遠藤宏美 八木美保子

明治期から現在までの我が国の教育のあり方を、学習指導要領の分析を通して明らかにする。

A5判・三四四頁・定価(本体二〇〇〇円+税)



γ 星

「菜の花」の教育研究から
思うこと

道草、自家不和合性、ア
ウトリーチ活動

渡辺 正夫

小学校時代、春になるとカラスノエンドウの鞘やオオムギの穂を使った笛を鳴らしながら道草をした。その季節、付近の畑に「菜の花」の仲間であるハクサイ、キャベツ、ダイコンの花も咲いていたのだろうが、残念ながら記憶にない。夏休みに宿題で出穂を観察した時、内類・外類が開き、葯から花粉が散る様は神秘的にすら思えた。高校時代、メンデル遺伝学の妙に感動し、NHK特集「謎のコメが日本を狙う」を見たことで、農学部植物育種学で学ぶことを決意し、本学農学部に進学した。学部三年時、日向康吉教授から、品種改良の基礎、ハイブリッド品種のからくりを学んだ。アブラナ科作物の経済的価値を可能にする自家不和合性も学んだが、さほど興味を覚えなかつた。また、米国から来日した自家不和合性研究者のセミナーを拝聴しても、理解が深まること

はなかつた。ところが何の因果か、卒論研究に始まり、現在に至るまで、菜の花を含むアブラナ科植物における自家不和合性の研究を行っている。道草の時には気にも留めなかつた菜の花を扱うことに人生の妙を感じる。

自家不和合性とは、被子植物で両性花をつけ、しかも雌雄両生殖器官が機能的・形態的に正常であるにもかかわらず、自己花粉では受精に至らず、非自己花粉でのみ受精が成立するという面白い現象であり、幅広い植物種に見られる。自分の花粉を見分けること、それを受精させないこと、換言すれば植物における近親交雑を避ける上手い仕組みであり、遺伝的な多様性を維持するための根幹となるシステムと言つてもよい。多くの場合、一遺伝子座S複対立遺伝子系で支配されていると説明がつけられる。この自家不和合性現象はアブラナ科や、ナス科、バラ科植物において精力的に研究がなされ、S遺伝子座上に、花粉側・雌しべ側S遺伝子が同定・解析されている。著者らがアブラナ科植物を材料にして研究開始後、雌雄S因子同定・三次元的相互作用、S対立遺伝子間の優劣性発現機構、雌雄S因子下流因子同定などの成果を達成し、花粉と雌しべの複雑な相互作用の一端を解明することができた。三〇年余りでこうした研究発展をなし

得たのは、日向教授からの指導、研究とともにした学生諸氏に加え、異分野である生物有機化学を専門とする奈良先端大・磯貝名誉教授、東京大・高山教授らとつながりを持てたこと、その共同研究によるところが大きい。それに併せ、師である日向教授の「これからの育種学は今すぐに役に立つことも大事。でも、五〇年後にその研究をやつていてよかつた、そんな研究を目指すこと、失敗を恐れずに」という言葉を研究生生活の指針にして支えられてきたといつても過言ではない。

大学人としての責務がそういった研究面だけでなく、多角的に広がつた三〇年でもある。その一端が研究成果を社会に分かりやすく伝え、次世代を教育するアウトリーチ活動であろう。著者も千件を超える活動を通じて、アブラナ科植物の自家不和合性、多様性を伝えるとともに、観察すること、深く考えること、さらには、友達との信頼関係構築の大切さも講義したつもりである。そうした中から次世代の日本国の科学を背負つて立つ人材が生まれてくることを期待してのことだ。

話は戻るが、著者がアブラナ科植物の自家不和合性について研究できた素地はどこにあつたろうか。本学農学部にて作物育種学講座を開祖した水島教授が附属農学研究所

所から異動し、アブラナ科植物の核遺伝学的な研究展開を始祖となす。さらに、水島教授の元、日向博士が助手として、自家不和合性研究を開始したことに端を発する。一方、遡れば著者の現ポストは附属農学研究所にあった。遺伝学・育種学への興味から本学での学びをスタートし、歴史をなぞるように現職で教育研究ができていたことは、人の縁の不思議以外の何ものでもない。本稿執筆時、世界的な新型ウイルス拡大により、様々な企画が延期・中止の状況下にあるが、一日も早い収束を祈念し、「菜の花」の不思議に思いを馳せる時が来ることを切望してやまない。

（わたなべ まさお・東北大学大学院生命科学研究所教授、植物分子育種学・植物生殖遺伝学、平成二年東北大学大学院農学研究科博士課程前期修了・博士（農学））

鳥山欽哉編

農学生命科学を学ぶための 入門生物学「改訂版」

B5判・二三八頁・定価(本体二八〇〇円+税)

私の本棚

☆

「四面書架」の嘆き

野家 啓 一

昨年(二〇一九)三月に東北大で二度目の定年を迎え、教養教育院を退職した。頭痛の種は研究室に置いていた本をすべて自宅に持ち帰らねばならないことで、これが想定をはるかに超えた大仕事となった。

実は私の仙台市内の旧宅は東日本大震災で「全壊」の憂き目に遭い、初めて「罹災証明書」なるものを交付された。父親が生まれた年に建った家で、築百年に近いのだから震度七にはひとたまりもない。さいわい、解体費用は仙台市が負担してくれたので、二〇一三年に一度目の定年を迎えた折に、退職金で家を新築することにした。設計をお願いした建築家のSさんに伝えたコンセプトは「四面書架」、つまり書庫の中にリビングルームがあるような仕様にしてほしい、というものである。

望みはかなえられたが、見通しが少々甘かった。研究室の本の量を少なめに見積もっていたのである。一年前にいざ運び込んだものの、とうてい収まりきらない。や

むをえず部屋の隅に段ボールのまま何段も積み重ねる仕儀となり、妻の響聲を買って今日にいたっている。

困るのは、商売柄引用頁を捜すときである。原本が段ボールの中にあることはわかっているのだが、どこに紛れ込んでいるのかわからない。次々と段ボールの開閉を繰り返しては、ため息をつくことしきりとなる。もつと悪いことには、目当ての本が見つからないままに、他の本に目移りがしてしまうことである。

先日もリスボン大地震を描写したヴォルテール『カンディード』の一節を引用しようと「岩波文庫」と上書きのある段ボールを開けたが見つからない。代わりに小島政二郎『眼中の人』が目に入った。タイトルに惹かれて覗いてみたのが運のつきである。実に面白い。著者の無名作家時代の自伝小説だが、冒頭には兄事した芥川龍之介の面会日(日曜日)の様子が活写されている。しかも、芥川の書齋がマラルメの書齋になぞらえられ、その雰囲気伝えるために、アーサー・シモンズ『象徴主義の文学運動』からマラルメの火曜会の情景が文庫本で五頁近くにわたって翻訳紹介されているのである。

もちろん本人の訳である。気になったので、その後刊行された二種類の邦訳(前川祐一訳、富山房百科文庫。

山形和美訳、平凡社ライブラリー)と読み比べてみたが、いずれとも遜色のない見事な翻訳である。小島政二郎といえ、私には大衆作家という印象しかないが、昔の文士には学があつたと思わざるを得ない。

もう一つ驚かされたのは、小島が芥川と競争して、バルザックの英訳(エヴリマン版)十三冊を読了していることである。『眼中の人』から二人の会話を引く。

「ねえ小島君、君が半分——七冊目を読み終わって、八冊目の第一頁を読み出したら、僕にちよいと声を掛けてくれないか」「どうして?」「いや、そうしたら、僕も第一冊から君と競争で読み始めるから——」「へえ」君が十三冊目を読み終わる日に、僕も十三冊目を読み終わって見せる。いや、もしかすると、僕の方が一日位早いかも知れない」

芥川の自信も大したものが、小島は十三冊目を読み終わつたとたんに「私は、芥川の好意にハッと目が醒めた」と書いている。芥川は競争心を煽って、小島が途中で挫折しないように仕向けたのである。

段ボール読書の欠点は、後を引いて芋づる式に読書範囲が広がることである。今回も上記のいきさつから柏倉康夫『マラルメの火曜会』(丸善ブックス)を書棚の隅

から引つ張り出す羽目になった。だが、そうこうしているうちに日も暮れかかり、締切り時間が迫ってくる。やむなく段ボールを横目で見ながら二冊目を買いにジュンク堂へ走ることになる。「広大な図書館に、おなじ本は二冊ない」というボルヘスの「バベルの図書館」(『伝奇集』)の理想からはほど遠い「四面書架」のわが書齋である。

(のえ けいいち・東北大学名誉教授/立命館大学客員教授、哲学・科学基礎論、昭和四六年東北大学理学部卒業)

東北大学教養教育院叢書 大学と教養3

人文学の要諦

東北大学教養教育院編

哲学・数学・宗教学・工学・建築学などの泰斗による論考集。人文学と教養が交差するところにある「知」の姿とその行方。

A5判・二四八頁・定価(本体二五〇〇円+税)

帰郷——「若手研究者出版助成」から



星

余は如何にして学際研究者
となりし乎

勝山 稔

——うちの大学院に進学してはいけません。

学部四年生の春、私は引導を渡された。

中国文学科の学生であった私は、卒論に没頭していた。次々と浮かび上がる疑問を研究室で思案していた時、青天に霹靂が飛んだのだ。

それには理由がある。私が想起する不明点の多くが、文学ではなく史学的な疑問に溢れていたからである。

そのまま文学研究科に内部進学するのはたやすい。しかし、自分が思い描く研究を考えると、本腰を入れて史学研究を取り組むべきではなからうか。退路を断られた私は、専攻を史学に鞍替えし、別の大学院に進学した。

史学の研究は新鮮であった。清朝考証学、通典、食貨志。今まで聞いたことのない術語の渦。隣接分野でありながら勝手がわからない。似て非なるものとはこのことを言うのか。もどかしい模索の毎日を通り越していたある

晩、ふと卒論を手にとった。そして今一度作品を読み直すと、意外な事実に気づいた。今まで語釈しか考えていなかった字面の中に、歴史学では解明されていない語句や事柄が数多く盛り込まれているという事実である。

婚礼の際に登場する媒酌を例に紹介しよう。当時の中国では婚礼でも法的にも重要な位置付けがなされていた。しかしその一方で、媒酌に否定的な見解も少なくなかった。通俗小説の中では、媒酌の発言は信用出来ぬもの、代名詞で、世間の激しい誘りを受けており、双方の媒酌像は余りに掛け離れているのである。

その原因を探ろうと当時の裁判記録をひもといたが、単に媒酌の悪行が縷々指摘されているだけであり、なぜ媒酌が敢えて虚言を発してまでも婚姻を成立させなければならぬのかが明示されていない。裁判記録に記述されない原因は当時の社会常識の範囲にあり、言及を省略したものと思われる。それゆえ言外に伏せられた実態を容易に伺い知ることは出来なかつたのである。

そこで私は、通俗小説に描かれた結婚事例をしらみつぶしに検証した。すると、生々しい当時の縁談事情が明らかになってきた。そしてその中でも最も驚くべきことは、中国では千年前から媒酌が結婚紹介業を兼業し、そ

の蔓延が社会問題となっていたということである。千年前と言えば日本は平安中期、清少納言が中宮定子との宮廷社会を振り返りながら墨をすっていた頃の話である。

結婚紹介業の蔓延で発生した社会問題はこのようなものである。結婚紹介は営利で行われるため、媒酌が紹介料を要求するようになる。そして利益追求のため、より多額の紹介料を支払う家には、より良質な縁談を紹介するようになる。そのため結婚費用が高額化し、貧窮のあまりに結婚できない男女が急増、駆け落ちや私生児、果ては金目当ての結婚詐欺まで横行する有様であった。

そして金に糸目をつけない結婚は、商人の家と官吏の家の通婚で顕著であった。

商人は金にものを言わせて官吏を抱き込む一方、官吏も科擧及第を売りに公然と多額の結納金を要求する。ここに貴賤を軸とした身分的価値観は、貧富を軸とした経済的価値観にシフトする社会現象の一端をつかむことが出来たのである。

若手研究者出版助成のおかげで、その後も私は学際研究を続けることができた。そして私の学際研究も広く知られるようになり、国内外から研究者が集うようになった。そんな私も、あと数年で還暦を意味する「耳順」の

齢に入る。時は流れるものだ。

しかし、私の学際研究はまだ終わらない。今後も様々な学際研究に取り組み、一つでも多くの果実を残し、そして私の蒔いた種を、いかに後学へ伝えるかを思い描いている。

様々な経緯で文学と史学という異なる分野を修めることとなったが、分野は異なるものの、共通することが一つある。それが資料の重要さである。

資料は、それを真剣に読もうとする人にだけ聞こえる小さな声で静かに語りかけてくるのだ。

(かつやま　みのる・東北大学教授、中国史学及び中国文学、平成一七年東北大学大学院国際文化研究科修士了)

第三回 東北大学出版会若手研究者出版助成刊行図書

中国宋一明代における婚姻の学際的研究

勝山　稔 著



A5判・三四六頁・定価(本体三六〇〇円十税)

書評

高橋秀太郎・森岡卓司編、東北大学出版会〇一八年〇月刊行

『一九四〇年代の〈東北〉
表象 文学・文化運動・地
方雑誌』



と星

方雑誌』

押 野 武 志

本書は、「劣性」「後進性」を帯びていた〈東北〉表象が変貌し、〈東北〉の固有性と普遍性をめぐる諸言説が活発化する一九四〇年代に焦点をあてる。〈東北〉の文学や文化運動、新聞・雑誌といったメディア分析から浮上するのは、錯綜体としての〈東北〉とでも呼ぶべき〈東北〉像であり、あるいはそれゆえに志向される、分かりやすい〈東北〉の表象化である。本書の射程は、事例研究に留まらない。四〇年代は、戦前／戦後といった連続性と断絶をも内包しており、一〇年という短いスパンではあるが、日本近代史における中央と地方をめぐる二項対立、異境と原境をめぐるナシヨナリズムとオリエンタリズムの葛藤など、地方表象に関わる諸問題とも接続しうる広がりのある研究となっている。

全8章それぞれの論考は、論者も異なり、分析対象も様々で独立的に読みうるものとなっており、総体として、〈東北的なるもの〉が、その矛盾も含めて明らかにされる。こうした表象化作用に少なからぬ影響を及ぼしたのは、序において予告されているように、高村光太郎や松田甚次郎らによる宮沢賢治受容だろう。実際、複数の章において、賢治と〈東北〉表象との関連性が横断的に論じられている。賢治研究者の端くれとしては、こうした視座に最も惹きつけられた。

1章「島木健作の「地方」表象」（山崎義光）においては、「見聞」のリアリスト・島木健作と協働的な農業実践者・松田甚次郎の関係のアナロジーとして、賢治の「ポラーノの広場」における記録者・キユーストと産業組合的広場の建設者・ファゼーロの関係を読み替える。賢治の農本思想の特質が、四〇年代から捉え直されている。

4章「提喻としての東北——吉本隆明の宮沢賢治体験」（森岡卓司）では、吉本の〈東北〉表象の危うさが指摘されている。その特質は、賢治のイーハトヴのように、実体性を捨象しつつ、アイロニカルに〈東北〉の全体性を表象する「提喻」というレトリックに基づくものであ

り、保田與重郎から引き継いだ吉本の賢治受容の核心にあったものでもあったという。

5章「〈脱卻〉の帰趨——高村光太郎に於ける引き延ばされた疎開」（佐藤伸宏）は、戦争詩から戦後詩へと至る高村光太郎詩の帰趨を論じたものではあるが、賢治の詩と対比的に論じているところが興味深い。高村詩の主体が大地上の定点に身を置きながら対象を記述するのに対して、賢治詩の場合は、自在な視線の移動によってそれを行っていると。たとえば、詩「岩手山」において、岩手山は、「その散乱反射のなかに／古ほけて黒くえぐるもの」、「ひかりの微塵系列の底に／きたなくしろく澱むもの」という、「もの」の班列による「提喻」によつて表象される。この個別具体の対象を抽象化する「もの」の自在さと遍在性は曲者で、4章で指摘されているように、ひとに取り憑き、知らず知らずのうちひとを呪縛もする。

四〇年代の「雨ニモマケズ」受容も、それを物語っている。戦時中は、軍国主義・農本主義のプロパガンダとして、戦後は、復興のスローガンとして、現実の諸矛盾をカッコに入れながら無批判に受容されていく。「雨ニモマケズ」の「ワタシ」は、理想の自己像を列挙しなが

ら、「サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」というのだが、そのような「モノ」に、現実においては誰もなることはできないだろう。他者のために東西南北奔走する献身的な人間が、「デクノボー」などと呼ばれることなどありえない。「雨ニモマケズ」は、現実において表象不可能な、ありえない「モノ」に満ちている。賢治と関連する章にしか言及できなかったが、本書はトータルとして、東北的なる（もの）の表象の不可能性とそれを縫合する「提喻」としての（東北）という、表象が帯びる政治性を実証的に論じている。

（おし）の たけし・北海道大学教授、日本近代文学、平成六年東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学)

学術出版をお考えのみなさまへ

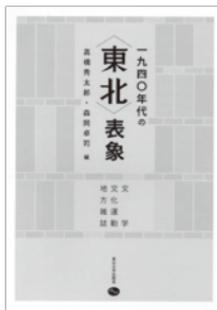
専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシードイングスなどの出版をご希望の方は、ぜひ小会宛にご連絡ください（連絡先は表紙面参照）。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談させていただきます。

高橋秀太郎・森岡卓司 編

一九四〇年代の〈東北〉表象

文学・文化運動・地方雑誌

昭和二〇年の敗戦、占領に前後する一九四〇年代の日本文学において、東北及び北日本がどのように表象されたのかを明らかにする。



A5判・二七〇頁・定価(本体五〇〇〇円十税)


 7 星
 錆びゆく歯車

中 村 美千彦

東北大学は「学位プログラム型大学院改革」において、先頭を走る大学である。学位プログラムとは、学問分野のディシプリンに基づいた基盤的教育組織を維持しつつ、学問上あるいは社会からのニーズに応えるため、いわゆる学際、国際、文理融合、産官学連携などの特色ある教育を行うものである。通常の課程に所属する学生の中から特に意欲的な学生を選抜して、付加的な教育を行うかわりに経済支援を充実させる。それによって「博士離れ」を防ぎ充足率を下支えする役割も担う。日本は博士教育の後進国と言われて久しい。博士取得者の社会での活躍機会に関するあらゆるデータが、主要国の中で特異的に低調であり、その伸び率も振るわない状況が続いている。科学・経済・政治あらゆる面で日本の国際的立場は後退を続けており、その対策として、博士課程の教育改革と博士人材の社会での活用が唱えられる場合も少なくないという状況が、学位プログラムの背景にはある。

博士学生の人数やレベルは大学の研究力に直結するし、優れた博士を輩出することは研究大学でもある東北大にとって至上命題でもある。そのため、私自身も長く学位プログラムでの教育や運営に携わってきた。所謂リーディング大学院（グローバル安全学トップリーダー育成プログラム）、変動地球共生学卓越大学院では産官学連携を、JSPSの受託事業である日独共同大学院、環境・地球科学国際共同大学院（GR-IEES）では国際連携を主題として来た。ここでは、日本の現状のどこに問題があるのかを、主にドイツの状況に照らして考えてみたい。

ドイツの博士後期課程では、授業料はごく安く、加えて日本の学振特別研究員よりも恵まれた経済サポートを受けながら研究ができる。博士修了後に民間企業に就職する場合も、修士卒に比べ極端に機会が少ないわけでもなく、博士の学位に見合った待遇が得られる。よって、名の通ったラボには世界中から志願者が集まり、優秀な学生が選抜される。企業が博士を採用し高い給与を払うのは、当然のことながら学位記に敬意を払ってのことでない。その能力が、企業活動において不可欠であり高く評価されるからである。つまり、高度な専門性に加え、

自ら立案・実行して結果を得る一連の能力やコミュニケーション能力、さらには、新しい何かを掴み取った経験が必要とされていると考えられる。そして企業は様々な形で大学の教育に対して投資を行い人材育成にコミットする。以上のような状況は、残念ながら、日本の大学院が置かれた現状とはかけ離れている。

大学院で博士学生を面白がらせ、その能力を存分に発揮させるには、指導教員にかなりの力量が求められる。では積極的に博士を雇用している企業はどうだろう。業界で先頭を走り続けるのに不可欠な創造性を確保したり、新しい価値観・ライフスタイル・未来像を提案したりするのは容易ではないはずで、そのようなニーズがあるからこそ、高度な人材を必要とするのだろう。逆に言えば、大学院は、柔軟な好奇心と幅広い能力を身につけた人材を育成しなければ、そのようなトップレベルの企業からの期待に応えられないことになる。

組織にとって、人材の内育成は、ルーチンワークの段階では能率が良い。しかし先頭に立って新規開拓を行うには、外部からの知識・経験の導入や、ジェンダーも含めた多様性がモノをいう。そう考えると、日本の長い停滞は当然の帰結のように思われる。大学、学生、家庭、

企業、政治、経済、社会、文化が、歯車のように複雑に絡み合ったまま、ひたすらこれまでの動きを繰り返すだけで、激動する国際情勢から取り残されつつある。行政の枠組み一つをとっても、文科省や大学のみで解決できる大きな問題は、もはや何一つと言って良いほど存在しないのである。ここを改善すればあそこが改善される、という要素還元の状態にない以上、なんとか歯車をまとめて組み替えるしかない。そうでなければ、錆び付くのを待つばかりである。

(なかむら みちひこ・東北大学大学院理学研究科教授)

科研費による出版を承ります。

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費(学術図書)」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声がけ下さい。「見積書」「発行部数積算書」等の作成を承ります。

【最近の実績例】

★平成三〇年度

西田文信著 『ナムイ語文法の記述言語学的研究』

高橋美能著 『多文化共生社会の構築と大学教育』

高橋秀太郎・森岡卓司編 『一九四〇年代の(東北)表象

文学・文化運動・地方雑誌』

★平成二九年度
尾園絢一著 『パーニニが言及するヴェーダ語形の研究

重複語幹動詞を中心に』

世界的に見て、日本のコロナ対策のまずさと、デジタル化がかなり遅れてしまったことが報道されている。授業のレポートの中で、「日本がこんなに後進国だとは思ってなかった。がっかりした。」という学生の記述を見て、うん、と思わずうなずいてしまった。高度経済成長を成し遂げた日本は、中村美千彦さんが指摘する、「ひたすらこれまでの動きを繰り返すだけ」の「錆びゆく歯車」となっていたのだ。

高度経済成長に続く一九七〇年代では、日本は本格的にデジタル改革を進めるべきであったのだが、学校教育を見ると、コンピュータなど情報教育を開始したのは二〇〇〇年からであった。この頃、多くの留学生が、コンピュータ利用の新しい教育方法を求めて来日したが、日本は、彼等に見せるだけの実態はなく、伝統的な教育方法とカリキュラムのままであった。

二〇二〇年、新型コロナウイルスにより、日本では、ようやくテレワークによる労働や教育が始まったが、すでに世界的には新たなステージに入っており、「歯車をまとめて組み替える」ほどの社会革命が必要である。遅ればせながら、東北大学出版会の会議も私の大学での授業も、Zoom方式を始めたところであるが、臨時的な代用ではなく、未来を拓く新たな創出ができるか、真価が問われることになる。(水原克敏)

宙

(おおぞら) に輝く北斗の七つの星に寄せて、
東北大学出版会が読書人に贈るエッセー
第三十三集

内 容

- α 星 自著を語る『ヨーロッパワイン文化史』銘醸地フランスの歴史を中心に／野村啓介
(東北大学大学院国際文化研究科教授)
読むこと考えること／深谷優子(東北大学大学院教育学研究科准教授)
- β 星 「菜の花」の教育研究から思うこと／道草、自家不和合性、アウトリーチ活動／渡辺正夫(東北大学大学院生命科学研究所教授)
私の本棚／「四面書架」の嘆き／野家啓一(東北大学名誉教授／立命館大学客員教授)
- δ 星 帰郷―「若手研究者出版助成」から／余は如何にして学際研究者となりし乎／勝山稔(東北大学大学院国際文化研究科教授)
- ε 星 書評・高橋秀太郎・森岡卓司編・東北大学出版会二〇一八年一〇月刊行『一九四〇年代の〈東北〉表象 文学・文化運動・地方雑誌』押野武志(北海道大学教授)
- η 星 東北大学出版会だより33／錆びゆく歯車／中村美千彦(東北大学大学院理学研究科教授)